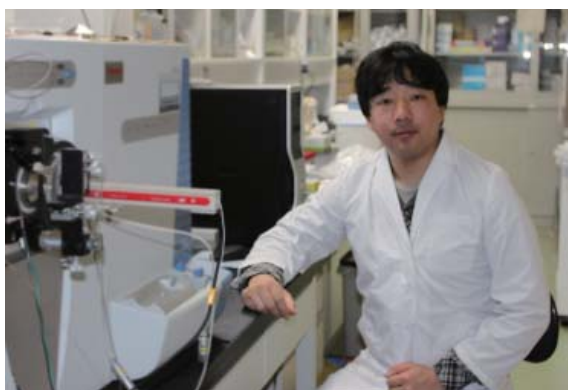


着任のご挨拶

特任助教 深草俊輔



前任の河原特任助教の退職に伴い、前年の九月に古代学学術研究センターに特任助教として着任致しました。この場をお借りしまして、着任のご挨拶をさせていただきます。

私の専門は構造生物学で、さまざまな役割を持つ蛋白質についてX線結晶構造解析といった物理化学的手法を用いてその蛋白質の形を明らかにするとともに、他の物質との相互作用や溶液中での状態といった情報を合わせてその蛋白質がどのような機能を持つか解明するものです。私は特にX線結晶構造解析を用いて病原性大腸菌の病原性に関わるいくつかの蛋白質についてその形を明らかにするとともに、超遠心分析といった手法を併せて行うことで、それら蛋白質がどのようにして病原性を示すかというモデルを予想しました。そういった折、本学において文化財中の膠や絹といった蛋白質の分析を行っている事を知りました。そこで驚いたのは蛋白質を煮溶かした状態にある膠も文化財中に残存していたことです。本学において進められている文理融合事業のもとでこのような新たな知見を得られる事に感動し、センターの一員となるに至りました。

現在、すでに前任者が確立しました文化財中の膠、絹に対する質量分析の応用、発展に取り組んでおり

ます。若輩者につき関係者の皆様にはご迷惑をお掛けする事も多いと思いますが、ご指導賜りますようお願い申し上げます。

調査報告

韓国・ベトナムの都城遺跡・都城
関連遺跡の現地調査

上野邦一（古代学学術研究センター特任教授）

都城遺跡・都城関連遺跡について、韓国、ベトナムの二国で現地調査を行った。参加者は、館野和己、出田和久、奥村和美、宮崎良美と私の5人である。都城関連遺跡としたのは、都城の内外に造営された寺院、支配者の陵墓などの遺跡である。見学した順に調査所見などを報告するが、遺跡・寺院について、一般のガイドブックなどに記述がある事柄は省略する。

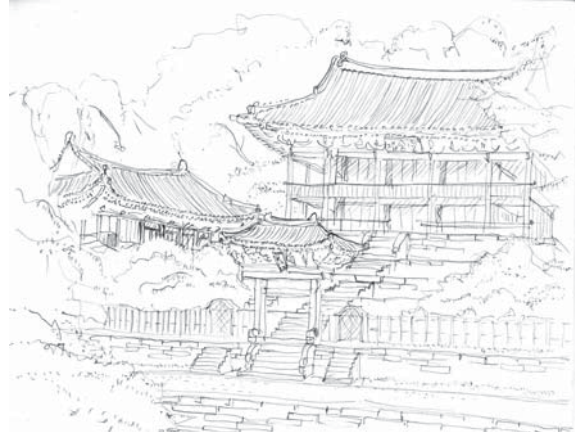
韓国の現地調査(2013年3月23日～28日)

韓国の都城遺跡、都城関連遺跡の現地調査を2013年3月におこなった。釜山から慶州に入り、慶州から海印寺、扶余に寄り、最後にソウルの宮殿・寺院などを見学し調査を行った。

第一日目 慶州・仏国寺釈迦塔は修理中であった。工事足場の外壁を透明板で囲い、修理工事を見学できるようになっていた。さらに、足場の中へも入ることができ、修理工事を広く公開する工夫が見られた。中心建物大雄殿の北にある建物は、日本の伽藍で言えば講堂に当たる。この講堂相当の建物の桁行は八間で、日本古代寺院の講堂桁行八間と共通する。慶州国立博物館は、本館が改修中であった。今回、Kid's Museumという言葉を知った。博物館の、一定のスペースを子供向けの展示室にしているのである。子供からの要請があれば、学芸員が説明に対応する、という。Kid's Museumは日本では、あまり見たことがなく、考えさせられる展示であった。聞くと、欧米では、普通に普及している、という。



扶余の羅城発掘現場



ソウル 昌徳宮

第二日目 慶州の都城内に建設された皇龍寺跡、芬皇寺を見学し、その後“月城”へ行く。月城は、慶州の宮殿域と考えられていて、盆地の南端の小高い丘陵の上にある。月城の南で城郭に入る濠に架かる橋上建物を復原している。発掘調査に基づいて想定していて、元は、橋の両端岸に門が建っていた、とする。日本には事例がなく、興味深い。今は月池と呼ばれるようになっていて、復元されたアナプチ(雁鴨池)を見学後、慶州の都城の南域にある、南山磨崖仏と呼ばれる遺跡へ行く。都市の立地と仏教の関係があったことを考えさせる遺跡である。

石窟庵を見学後、文武大王陵のある海岸に行く。海岸で多くの人が思い思いに祭壇を設け、崇拝を行っていた。日本ではあまり見かけない宗教行為で、海・文武大王陵・伝統的慣習など相互が関連していることを示唆する。感恩寺は、石塔と木塔の違いはあるものの、平城京薬師寺伽藍の手本ではないかという説がある。

第三日目 世界遺産になっている海印寺には、八萬大蔵経を納める長大な建物が、最上段にある。私は長大な建物やその中にある大蔵経よりも、長大な建物の間で両端に、桁行2間の小建築があることが気になった。偶数間の建物が珍しいからである。その後、扶余へ向けて移動し、途中でまず益山で弥勒寺を訪問、西の石塔を修理中であった。玉宮里遺跡は寺院跡である。さらに公州で武寧王陵、公山城を見学する。

第四日目 扶余国立博物館を見学後、扶余の羅城発掘現場を、沈相六さんの案内で見学する。長大で堅固な土塁を築いている。日本の都城には、部分的に羅城があったろうが、都城全体を囲う羅城はなかったの、都城を巡る環境に日韓で大きな差が

あったことが分かる。すぐ近くの整備が終わっている陵山寺、同じく整備が進み公園になっている陵山里古墳群を訪問。あちこちで子供たちが遺跡に見学に来ているので聞くと、新学期のはじめに歴史教育で近辺の遺跡へ行くことが多い、と教えられた。定林寺、軍守里廢寺を訪問し、扶蘇山城を見学後、王興寺跡へ行く。王興寺は川からアプローチすることが可能であったようで、伽藍の前に船着場があった。その後、ソウルへ移動。

第五日目 ソウルの国立中央博物館にある敬天寺にあった十層の巨大な石塔は圧巻である。李炳鎬さん(博物館学芸研究官)と、韓国の都城の最近の成果について意見交換を行う。扶余での発掘調査の成果から、従来とは違う、新たな見解が生まれつつある、という。

夢村土城、漢城百済博物館、風納土城を見学。夢村土城は、ソウルで開催された、オリンピックの際に大規模に発掘調査が実施され、その後公園として整備されている。韓国の都城発生を考える上で重要な遺跡である。漢城百済博物館では、実際の土塁断面をバックにジオラマ風に土塁の築造の様子を展示していた。

第六日目 ソウルで昌徳宮、宗廟、景福宮を見学。景福宮は近年復原整備された。

調査の所見 現地調査を通じて、訪問した遺跡の多くが整備され、公園化が進んでいる。また、国立博物館ではKid's Museumを設けていて、大人用の展示とは別に、相当の広さをこの展示に用いていた。日本の博物館でも見習うべきではないだろうか。

ベトナムの現地調査(2013年9月12日～17日)

ベトナムの都市遺跡、関連遺跡の現地調査を5日



フエ 社稷壇の調査



ハノイ タンロン城旧城門の1つ

間おこなった。上野は国際シンポジウム参加のため2日早く10日にハノイへ入った。まずハノイとその近辺の都市遺跡、その後フエへ赴き、フエの都城、都城内祭祀場と皇帝陵とを見学し調査した。

第一日目 国立歴史博物館・玉山祠・一柱寺を見学。歴史博物館は、植民地時代にフランス人設計者による建物である。博物館の展示は、数年前に比べて整えられてきている。

第二日目 ハノイの南180キロメートルほどに位置するタイン・ニャー・ホー（胡朝城）遺跡を訪問する。タイン・ニャー・ホーは、1397年から1407年の10年ほどの短い期間の都であった。石造りの城壁が残っている。2011年に世界遺産に登録され、南門付近が整備されていて、近接して展示施設がオープンしている。南郊壇遺跡もタイン・ニャー・ホー遺跡に関わる遺跡として2011年に世界遺産になっている。近年発掘調査が実施され、その後公園として整備されている。タイン・ニャー・ホー遺跡の整備も、南郊壇の整備も、発掘調査時点の遺構検出のままではなく、人工的に手が加えられていて、問題があろう。

ホアルー遺跡はタンロン都城の一つ前の都城で、タイン・ニャー・ホー遺跡に近い。宮殿域は不明で、都市域も明らかではない。しかし、訪問者用に外周での整備が進行していて、門が二ヶ所建っている。ただ、現在門が建っている位置に、当時門が建っていたのかについて考古学上の証拠はないと思われるし、建てられたような門がかつて存在したかどうか疑問が残る。

第三日目 ハノイの市街地中心にあるタンロン（昇龍）皇城遺跡を見学する。考古学院 Triue さんから、調査所見の説明を受ける。タンロン皇城遺跡は

2002年からの緊急発掘調査で発見された、ハノイを拠点とした歴代王朝の宮殿遺跡である。2010年に世界遺産に登録された。2004年以降、日本人研究者との共同研究が進み、遺構の解釈、遺物の保存に成果を生み出している。A区・B区と呼ばれている地区は、見学が可能なように通路が設置され、発掘調査で検出した遺構を見ることができる。ただ、遺構は錯綜していて、適切なガイドブックや表示がないので、一見しただけでは理解が難しい。

ハノイ郊外にあるルンケイの都市遺跡を見学する。この都市遺跡は専門家の間ではよく知られているが、日本では馴染みが薄い遺跡である。環濠と土塁が残る。ただし中心の宮殿域は不明で、土塁の内側の様子も解明されていない。フエへ移動。

第四日目 フエの皇城遺跡へ。まずフエセンターで、センター長の Phan Thanh Hai さんから世界遺産フエの概要と、調査の成果の様子とをヒアリングした。その後南正門である午門から宮殿域に入り、宮殿群を見学・調査、その後二つの皇帝陵へ向かう。

フエは風水思想に則って建設されたことで著名である。午門に立ち南を見ると、案山に位置づけられる御屏山が確認できる。最後の統一王朝である阮（グエン）朝の第二代皇帝の明命（ミンマン）帝陵、第四代皇帝の嗣徳（トゥドック）帝陵を見学する。フエの陵墓は、通常皇帝存命中に造営を始め、陵墓だけでなく離宮のような機能をもっていた。皇帝が亡くなると、ここに葬ると同時に、新皇帝が宮殿に居住し前皇帝家族は、この離宮に居住するのが習慣である。こうした、皇帝の死と家族の動向が興味深い。

南郊壇では、現在も祭祀を行っているらしく、祭壇に供物が供えられていた。

第五日目 天姥寺、文廟、社稷壇を見学・調査した。文廟、社稷壇は国家の祭祀場であるが、文廟は訪問者がほとんどいない郊外の公園、社稷壇は都市内のオープンスペースになっているだけであった。

調査の所見 ベトナムの都城遺跡は、未解明の部分が多い。都城の領域や、宮殿域の領域が分かっていないので、ベトナム国内での、相互の比較が難しいし、さらに東アジアの都城との比較も困難である。ベトナム国内で、今後発掘調査を進めることが望まれるし、その成果が期待される。ベトナムでは発掘調査が一段落すると、整備を行うのが一般的らしいが、その整備手法は、研究成果を反映したものになっていない場合があり、問題であろう。今後は正していく必要がある。

古代学学術研究センター 月例研究会

当センターに参加している様々な学術分野の研究者が相互の研究内容を理解し、学際的研究を推進する基盤を作るために、月例研究会を開催しています。

5月8日(水) 増井 正哉

「ガンダーラ・ラニガト遺跡の調査と保存・修復」

6月5日(水) 西村さとみ 「平安京と賀茂神」

7月3日(水) 河上 麻由子 「梁職貢図について」

10月2日(水) 宮崎良美

「奈良盆地歴史地理データベースの構築と課題」

11月6日(水) 上野邦一・館野和己・出田和久

「ベトナム都城遺跡の調査報告」

12月4日(水) 樋口百合子

「中世名所歌集考—『歌枕名寄』成立と継承—」

刊行物案内

本センターの研究論集『古代学 第6号』および『都城制研究(8)』が、2014年3月に刊行されました。

古代学 6

「WebGIS データベースの試み—奈良盆地前方後円墳データベースを事例に—」 出田和久・石崎研二・宮崎良美／「平泉無量光院の造営プラン—GIS の利用に向けての試論—」 前川佳代・島原弘征／「続・法隆寺伝来百萬塔をめぐる憶説」 松村淳子／「質量分析による平城京跡から出土した墨に残存するウシ膠コラーゲンの同定」 深草俊輔・河原一樹・小池伸彦・館野和己・中沢隆／「膠を分解する真菌の分泌プロテアーゼ—真菌の生育による文化財微生物汚染の観

点から—」 木原山奈々・河原一樹・深草俊輔・鈴木孝仁／「膠に関する願書資料—「古梅園造墨資料」翻刻と解題(7)—」 六車美保／「千歳松関係と歌資料—「古梅園造墨資料」翻刻と解題(6)—」 的場美帆／「『歌枕名寄』の継承—刊本の行方—」 樋口百合子

都城制研究(8)

「古代都城と寺社の関係」 館野和己／「難波における古代寺院造営」 谷崎仁美／「大津宮と寺院配置」 葛野泰樹／「平城京における大安寺の造営計画」 森下恵介／「平城京と寺院」 中川由莉／「長岡京と寺院」 古閑正浩／「平安京と東西寺・常住寺」 網伸也／「大宰府と寺社」 松川 博一

学際的共同研究体制に基づく

タンパク質考古学創成事業との連携

「学際的共同研究体制に基づくタンパク質考古学創成事業」 主催、当センター共催でシンポジウムを開催しました。

仏像の損傷と修復(2013年6月1日、於・奈良女子大学)

漆研究の最前線(2013年9月28日、於・奈良女子大学)

骨(2014年3月15日、於・奈良女子大学)

地域貢献に関わる活動

センターの研究活動成果を地域社会へ還元する一環として、次の地域貢献活動を行いました。

- ・奈良県道路建設課「中和地域周遊キャンペーン大和浪漫回廊」 監修協力(2013年5月25日~6月30日)
- ・奈良県ウォーキング協会 第11回 大和路まほろば ツーデーウォーク「大和平野の万葉歌碑を巡るウォーキング」への講師派遣(協力研究員・樋口百合子/2013年11月22日)
- ・NHKBS プレミアム番組「英雄たちの選択」 歴史考証協力(協力研究員・前川佳代/2013年12月19日放送回)
- ・NHK 番組「歴史秘話ヒストリア」制作協力(同・前川佳代、森由紀恵、黒田洋子/2014年4月2日放送回)

奈良女子大学古代学学術研究センター

Newsletter No. 6

2014年3月31日発行

〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 205号室

TEL/FAX: 0742-20-3779

URL: <http://www.nara-wu.ac.jp/kodai/index.html>

e-mail: kodaigaku@cc.nara-wu.ac.jp

編集: 館野和己・宮崎良美